



會 報

第9号
昭和61年10月

社団法人 北海道美術館協力会
札幌市中央区北1条西17丁目 電話011-644-4025



移動美術館開館挨拶（蘭越町公民館前）

9号
昭和61年10月

退任のごあいさつ



田上吉也 (前会長)

はじめに

私は1977年7月20日、任意団体、北海道美術館協会の理事長に就任、同時に道立近代美術館協議会会長の職もお受けしました。さらに1979年8月1日、協力が「社団法人化」されて、引続き会長として8年間の重責を完うさせていただきました。これも、副会長、理事をはじめ会員各位の暖かい友情とご支援の賜物と心から感謝申し上げます。また、長期間にわたり、ご厚情とご支援を賜りました美術館の方々に厚く御礼申し上げます。

私はすでに高齢者となり、辞意を表明していましたところ、1986年6月の理事会で受け入れられ、而も後任者として、私の希望する、武井正直氏に就任していただいたことに心から感謝しております。

武井氏は、新しい時代の夜明けの窓に輝く、知性と情感豊かな、閃めきの人であり、まことに得難い方に就任していただいたと心から喜んでいる次第です。どうか、新しいコスモスをてらす夜明けの星よ、敬愛する武井新会長の出発の門出を祝福して下さい。

道立近代美術館の誕生

1977年7月20日、道民の待望久しかった、本道最初の道立近代美術館が完成し、ついに新しい美術の扉が開かれました。

荒廃の中から人間生命への心の回復を美術に求めて、悲願の灯は……広く道民に贈る美の伝承と創造の基地として、多彩なジャンルの系列の中から、選別された道内外の作品、世界的作品に加え、倉田館長を主軸とした幹部、学芸員の秀抜な企画運営の妙に支えられて、運営は軌道にのり、開館8年にして、来館者は250万人を突破する盛況を見るに至りましたことは大きな喜びであります。

美術館協会の創立

本協会は、1977年4月「北海道美術文化振興に寄与する」ことを目的として、設立され同年4月19日、第1回総会を、札幌グランドホテルで開催、会員120名参加

によって「北海道美術館協会」として万場一致で議決され発足しました。

同年7月20日、美術館オープンと同時に、美術館側の要望も受入れ、ボランティア会員を中心に、売店、解説、広報等幅広い協力活動を開始しました。

当初は、国内では前例のないボランティア活動のため、色々戸惑いがありましたが、組織の強化と一致団結を図り「与えて求めることのない」ボランティア精神を支えとし、謙虚の中に互いに助け合い、徐々に、ボランティア活動を軌道に乗せて行きました。

一方、事務局体制を整えるため、専務兼事務局長として、手嶋三郎氏を迎え入れてから、企画、運営も順調となり、一方会員も急速に増加、300余名に達し、経済力も加わり「社団法人化」への可能性が出てきたので、この実現について、手嶋局長にお願いしたのですが、過労が祟って病に倒れ、辞任されたのは痛恨の極みでありました。しかし、幸いにも、54年8月1日、社団法人設立の認可を得たことは、誠に悦ばしいことでした。

この間、事務局長を助けて、猛烈な働き振りをされた鈴木節子さん(当時事務局次長)の功績についても、今ここに深謝申し上げる次第です。

また、法人化に至るまでの過程で、理事各位の心労と熱意を忘れることもできないし、さらには、協会の活動、目的に暖かいご理解と多額の資金援助を寄せられた「梅津財団」のご協力に対しても、あらためて、厚く御礼を申し上げます。



田上氏を送る夕べ ('86.7.23)

会長に就任して

武井 正直



美術の秋、会員の皆様には益々ご清祥のこととおよろこび申し上げます。

さて、私はこのたび図らずも由緒ある美術館協会の会長をお引受けしました。田上初代会長とは異なり銀行マンの非文化人ですが全力投球でことに当たりたいと思います。どうか皆様の絶大なご支援をお願いします。

私ごとですが……私の「美術」との出会いは昭和22年の戦後混乱期でした。失意のある日倉敷市にある大原美術館を訪ね、荒んだ心が救われた貴重な体験があります。また近年札幌市に来てからは、近代美術館の近くに居を構えたこともあり、同館や三岸好太郎美術館にたびたび足を運び作品の鑑賞をしています。

このたび、美術に通じ美術を愛する心の豊かな人達で構成する協会に加入させていただき、皆様とともに北海道の美術文化の向上発展に多少なりとも寄与できることは、誠によるこびに堪えません。

ところで、近代美術館は明年7月に開館10周年を迎えます。これを機会にわれわれ民間人の手により同館に世界的な名画を寄贈したいと考え、別記事のような事業計画を樹てました。この企画を成功させるためには会員の皆様の深いご理解と力強いご支援が必要と考えます。運動がはじまるときには改めてご依頼申し上げますのでどうかよろしくお願い致します。

末尾になりましたが、道立近代美術館はじめ関係美術館の今後一層のご指導とご支援をお願い申し上げ、就任のごあいさつといたします。

館長に就任して

北海道立近代美術館長
(北海道教育委員会教育長)

植村 敏



北海道は、中央から遠く離れ、開発の歴史も浅く、文化面における地理的条件としては、決して恵まれているとはいえません。しかし、北国の風土の中で生まれ育った人達の中には、世界的な活躍をしたり、我が国文化の水準向上に大きな役割を果たした人達も数多くおります。

本道の芸術文化を振興させるためには、志を立てた作家達の意欲と努力が何よりも大切ですが、一方、芸術への興味、関心を抱く層の拡大と共に作品に対する一定の評価を行うことのできる社会的環境が必要と思います。

先日、道立函館美術館を道南58万人の歓びの中で、オープンすることができました。

その時の様子を伝える報道や、見学した方々の「激しい感動を覚えました。」との声も伝えられ、「本当に良かった。」と思うと同時に、道東方面の人も「地方美術館の建設に相当の期待を持っているだろうな」と思いました。

新聞の投書欄には、小さな美術館をいくつも作るよりは、札幌の近代美術館を充実した方が良いという意見や、逆に地方美術館こそ積極的に開設されるべきという意見もあり、兎に角、美術館に対する道民の関心が急テンポで高まってきたことを嬉しく思います。

早いもので、近代美術館は明年10周年を迎えます。

当時、道立美術館の館建設にふみきった、堂垣内前知事の決断に心から感謝しなければならないと思います。

始めの心配が杞憂であったように、これまでの入館者は250万人と、全国でも有数の館に成長しました。

道民から愛され、親しまれ、そして何よりも道民に育てられ、支えられてきたからに他なりません。

それというのも、館と共に歩んでこられた美術館協会の献身的な力添えがあって、はじめて今日の館の発展があったと考えます。

これまでのご協力に感謝し、また、これからも館と道民を結ぶ絆として、一層の御協力を頂きますようお願い申し上げます、ごあいさつといたします。

「道立近代美術館10周年協力事業はじまる」 —北海道に名画を贈る道民運動を展開—

理事・事業部長 建部直文

はじめに

美術館協力会ではことし10月から1年間、近美の開館10周年を記念する協力事業として、全道民に呼びかける募金運動を行うことになりました。集まった浄財で世界的水準の名画を購入して美術館に贈ろうという企てです。

ご承知のように名画は驚くほど高価です。民間のボランティア団体である私たちの力で、果してどれほどの賛同者を得られるか、募金額がどのくらいになるか、いっさいは始めてみなければわかりません。私たちは文化や美術を愛する道民の善意を頼りに、発起人に加わって下さる団体、企業、個人の有志の方々と手を携えて運動を進めてゆきたいと考えております。

募金の趣旨は文末に掲載しました。お読みになって「なるほど」と思われた方々は、どうか力を借して下さい。大口のご寄付、もちろん大歓迎ですが、職場や町内、学校などで1口100円単位を募金用紙に記名していただきながら積み重ねてゆく、広い範囲のいわゆる「100円募金」も、私たち協力会のあり方にふさわしいのではないかと考えています。10月から特別事業の事務局が近美内に設けられます（住所・電話は別掲）。期間が限られていますので、会の準備ができたところで走り出し、走りながら、ご賛同の皆さまの知恵もお借りしながらより充実した組織にしてゆきたいと考えております。以下は「北海道に名画を贈る道民の会」結成にいたる経過です。

経過

道立近代美術館は早いもので来年の7月、満10歳の誕生日を迎える。当協力会も地味ではあるが、法人格を持つのが国唯一の規模である協力団体としてそれなりの役割りを果たしてきたと思う。ことにボランティア部を中心とする女性会員の研鑽ぶりと無償の奉仕活動は、すばらしいの一語につきるものです。

協力会の内部で、近美10周年に向けた記念事業をとの声があがったのは確か昨年春ごろではなかったかと記憶する。当初は「協力会はあくまでボランティア組織なのだから、縁の下で力持ちに徹すればよい」との意見も

あったけれども、やがて協力会の10周年を記念する意味でも「何かやろうではないか」という方向へ、議論はごく自然に煮詰っていったのである。

ことしの3月の理事会で、会の創設以来の会長である田上義也先生がにわか引退の意向を表明された。老令のためというのが主な理由であった。しかし、戸惑いを隠さない理事たちを前にじゅんじゅんと辞意を述べられる先生の言葉の端々に「これから取り組む事業は生半可ではできないぞ、ひとつ若い力でたのむ、という意味合いが込められていたように、筆者には感じられた。

新年度にはいって、武井正直新会長を迎えた各種会合では、議題はほとんど記念事業一本にしばられた。事業といえば担当は事業部に決まっている。好む好まないに関係なく、準備作業に取り組みねばならない。会長や専務理事とも相談しながら理事会への答申案をまとめ上げたのは、7月も押し詰まったころであった。幸い一部の修正付きで事業部案は承認を得た。いま実施の仕上げ段階にはいっている。運動の骨格は次のようなものである。

- (1) 名称——「北海道に名画を贈る道民の会」とする。
- (2) 実行委員会——協力会の全理事のほか、発起人世話人や発起人を広く委嘱し、これらをもって委員会を組織する。委員会に事務局（事務局長）を置く。
- (3) 募金の方法——著名な団体、企業および個人有志に相応の寄付を要請するほか、全道民を対象にいわゆる100円募金運動を推進する。寄付者には所定の募金用紙に住所、氏名を記してもらい、全用紙を装丁して近美内に永久保存する。
- (4) 寄付金に対する特別非課税措置を国税局に申請準備中。
- (5) マスコミ各機関に協力方を要請する予定。なお北海道、道教委には協賛を、札幌市、市教委には後援方を要請する予定。
- (6) この事業は発起人総会の開催（日時未定）後、すみやかにスタートする。

現実と夢幻の間で



小田節子(会員)

時雨のせいであったと思う、私が『ボテロ』展を観るために北海道立近代美術館を訪ねた9月19日は、信じられない静けさの中で絵を観賞することができた。

会場を回りながら、ふと、あの巨大なおでぶさんの後に大勢の観客が隠されてしまったのではないかと、想いをめぐらせた。

絵の中の人物に問いかけても、まるでこちらの目を意識してそらすように、虚空を視ている。圧倒されそうなボリュームの肉体は装飾的であり、全体のバランスが保たれ不思議な安堵感さえ味わうことはできた。

それは、単純化された構図のせいとか色彩のせいとは別として、描写されているすべてがお互の存在感をまったく無関係にし、その事が理屈抜きでありやすらぎを与えるようだった。ボテロは絵筆を握った瞬間から、モデルをも含めた対人関係、勿論対物関係もだが、潜在意識がすべて誇張される部分を同一視させていると、感じさせるからだろうか……。

物足りなさを埋める時は常設展示室に入るのだが、いつ視ても心が洗われるパスキンの少女像や、マリー・ローランサンの婦人像と憂いの刻を過ごして奥へ進んだ。しばらく常設展示室に来ていなかったが、この春に世界した繁野三郎氏の『花菖蒲園』他の水彩画2点が目を惹いた。

繁野三郎氏は一昨年(2014年)の9月に、画業70年展を大丸画廊で展かれた。同じ頃、私はNHKギャラリーで、登山家の友人と写真と詩の2人展を催していた。

繁野氏に何かお会いできる機会があったら、お見せしたいと思っていた物を持参し、記念展にお訪ねした。

「これは懐かしい。大切に保存しておられましたね。うれしい事です。これを受けた小学生は特待生ではなかったかな。いまも描いていますか？」と、問われた。「いいえ、現在は視るだけです」とだけ答え、女学校卒業後、絵筆を折った事情は話さなかった。

繁野氏は、賞状をしみじみとご覧になった。側からご子息が「40歳代の頃ですね。ああ知った方の名がある。

亡くなってる人の方が多いな……」と感慨にひたっておられた。

賞状は北海道児童图画展覧会のもので、審査員は秋山任・熊田満佐吾・佐々木毅一・繁野三郎・竹田信夫・中根孝治・能勢真美・林竹治郎・藤野高常の9名が列記されている。

あの日の優しい表情が目には浮かぶ。その瞬間、私は怒涛に押し上げられるような錯覚におそわれた。だが、それは貯蔵庫を建て増す工事の杭打ちの音だとわかった。

展示の絵は微動だにできなかったが、菖蒲の花色が、私の心の中でふるえ滲んでいた。「風の結晶」発行人



フェルナンド・ボテロ「聖母マリア」1977年



繁野三郎「花菖蒲園」1975年

ブーニン



斎藤ゆりな(ボランティア会員)

スタニスラフ・ブーニン。昨年のショパンコンクールの優勝者です。コンクールの様子が何度もテレビで放映され、日本でもタレント並みの有名人になりました。私もこの19歳のピアニストに魅せられた1人です。

「何かが違う」と人に思わせる資質が、ブーニンには備っているようです。さほど鋭くない私の耳にも、他の出場者とはテクニック・音色・解釈など全く違って聴こえました。そのうえ人を煽るようなステージマナーや、取材陣を無視して窓から外を眺める態度。個性・実力・自信を合わせ持つ新人の登場を、強く印象付けました。

「音楽、すなわち楽器を演奏することは素晴らしい職業であり、ピアノで美しい人生を歩めると思うのです。」

「僕にとって、遊びも詩も文学も絵も、すべて音楽の中に見出せます。」

こんなことをテレもせずに言ってしまうブーニンの若さ。単純な私はこれだけで感動してしまいました。

19歳のピアニスト。若いのは確かですが、音楽の世界では昔からそう珍しい事ではありません。それに比べて画家の場合とはいうと近代美術館の常設展示で馴染み深い、エコール・ド・パリの画家を例にとると、そろそろパリに出てくる年齢です。キスリングとスーチンが19歳、バスキンとヴァンドンゲンは20歳、シャガール23歳、フジタは27歳の時パリの住人になっています。既に画家として歩み始め、制作に没頭していたとしても、皆まだ摸索期にあったという感じがします。画家の方が人生経験や内面の成熟が必要なのかしら。それとも演奏家の方が有名になりやすいのかしら……。と、とりとめもなく比較をしてみても、答が簡単に出る筈はありません。

さてブーニンの今後が楽しみです。私としては、ラジオのスイッチを入れた瞬間に「ブーニンのピアノ」とわかるような、過激な個性を持つピアニストになってほしいものだ、と勝手に願っています。

美の孤独性



北村恒雄(賛助会員)

ギリシャ・アテネ——照り返る夏の午後、神殿への長い段階を昇りきった時、そこは一面、白の世界だった。大理石のバルテノンはもちろん、そこかしこに散在する白い石柱、その残骸——世界は白以外の色の存在を許さず、私はまるで色彩感覚というものを一瞬奪い取られたかの思いで、呆然と立ちすくんでいた。と、刹那まったく別の色彩が目に飛び込んできた。巨大な大理石柱の側に咲く小さな黄色の花だった。あたりの白に比べ無視できる程、きわめて小さな別の色彩だった。けれど今でもその花の美しさを思い出す。圧倒的な白の中、凜として自らの色彩を主張する一輪の花の残酷なまで孤独な美しさを、鮮烈なイメージと共に私は思い出す。

思うに美とは本来極めて孤独な存在ゆえ、美しいのではないだろうか。それはたとえば闇夜に浮かぶ螢。あの灯の美しさは、漠と広がる闇に対するせのないばかりの生命の孤独な輝きの美しさ。あるいは、海の上を舞う白い海鳥の美しさ。空と海の巨大な青に対する白の孤独に鋭利な輝き。澄んだ藍の空に浮かぶ三日月。もっと言えば、近年宇宙飛行士たちが言う、宇宙空間に浮かぶ地球の美しさ。それは虚無の闇の中で、抱きしめたくなる程の美しさを持つという。——そんな単一としての孤独な美しさに美の根元がある気がする。美は、本来、孤独に生まれてきていると思う。

そして、神は彼らに魔法をかける。ひとつひとつの美しさを織りなすハーモニーを創る。それはモーツァルトの音楽の一小節一小節が単独として美しくも、それらが一編の音楽となった時まったく別の愛しい美しさが私たちを包むように、自然の織りなす美しさは、その孤独な美の加算ではなく——たとえばそれは、何光年も離れた孤独な何百億という星々が巨大な天の川というまったく別の造形美を創りあげるように、相乗的に輝き極まってゆく。自然は、その魔術を素粒子という極小の単位から、宇宙という極大なる存在まで階層多重に広げてゆき、壮大な交響詩を創りあげる。

そして、はるか古代から画家は、そんな自然に恋をしてきた。

函館美術館の誕生

館長 安達 整



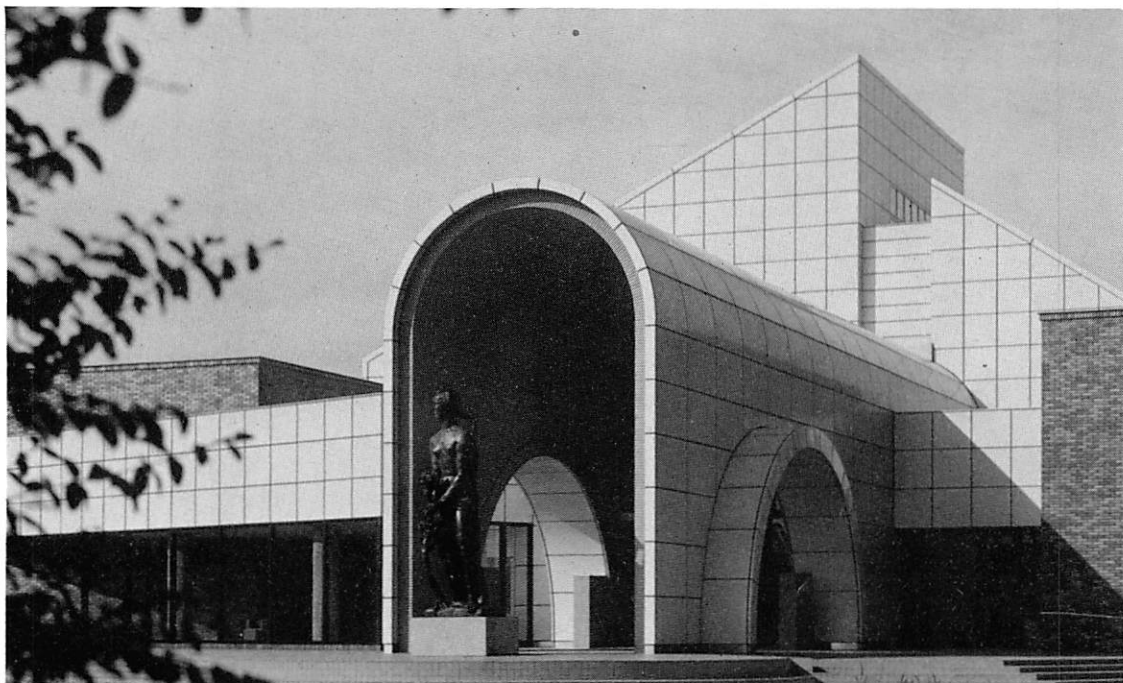
函館美術館がよいよ9月23日にオープンし、4館目の道立美術館として仲間に入れてもらうことになった。59年2月、函館市に設置することが決定されてから基本設計、実施設計を経て60年度建築工事を行ない、この3月完工4月1日機関設置によりスタートを切り開館準備に入ったのであった。

函館は、長崎・横浜とともにわが国でもっとも早く欧米に開かれた港町として知られ、北海道でいちばん古い歴史を持つ文化都市である。が、これまで美術館の施設がなかったため函館市はもちろん道南の地域の人びとが長年にわたり熱望してきたものであった。それがこのたび地元の宿願が実り、特別史跡五稜郭の隣接地旧函館商業高校跡地に、鉄筋コンクリート平屋建 2,350平方メートルに総工費11億8千万円で建てられた。外壁は焦げ茶色のタイルとクリーム色の金属パネル仕上げ。入口がドーム型、テラスは明るい橙々色、正面にブールデルの彫刻「自由」が置かれ同じ作者の「サツフォー」とともに函館美術館を象徴するモニュメントとなっている。中央の屋根は帆船を思わせる海の町函館らしいイメージ、玄

関をはいと美術鑑賞の期待感を盛りあげるコンコース、崇高なふんい気を持つ中央ホールにはロダンの「バルザック」ブールデルの「果実」「聖母子」「ペートーヴェン」連作3点と西洋近代彫刻が並び、ほぼまんなかに位置しているルノワールの「勝利のヴィーナス」が何ごとかを語りかける。展示室は主展示室と特別展示室からなり、観覧が終ったあとはロビーで余韻を楽しんでもらうようにと美術鑑賞の流れにそった配置になっている。この敷地は函館市の所有であるが、すでに北洋資料館が建てており、将来実現されることが望まれている市民ホールとともに函館市の文化ゾーンとして環境整備が迫られている。

隣りの高さ60メートルの五稜郭タワーから、史跡五稜郭の美しい城郭の形を見ることができが、こんど函館美術館ができたことにより一段と景観がひきたち函館を訪ずれる人びとに楽しんでもらうことは間違いない。

建物もさることながら、美術館の生命は所蔵される作品であるのはいうまでもない。函館美術館のコレクションの特色をあげると、①函館が生んだ代表的洋画家田辺

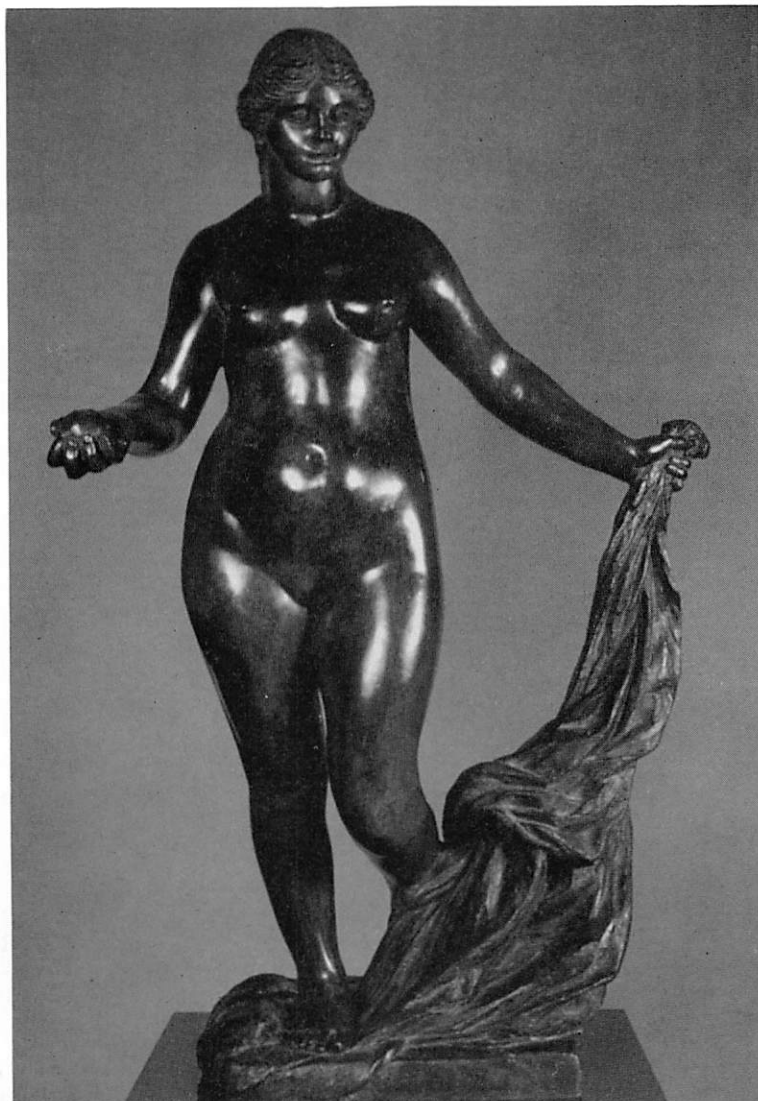


函館美術館外景<モニュメント彫刻—ブールデル>

三重松をはじめとする道南ゆかりの作家のすぐれた作品を系統的に収集展示する。常設展示室には、わが国ではじめてロシア人レーマンから油絵の手ほどきを受けた横山松三郎の「菊」や大正3年17歳で文展に初入選し話題となった高桑千代雄の作品など道南の美術の歩みをうかがうことができるよう展示されている。②ロダン、ブールデル、ルノワールなどの西洋近代彫刻のコレクション、これらは、「自由」の像をのぞき松前町出身の書家金子鷗亭氏が函館美術館の設立にあたり長年の個人のコレクションや創玄書道会の所蔵美術品を一括寄贈されたものである。③さらに、当美術館では、絵画、彫刻、工芸などのほかに書も扱うことを方針としており、書の流れを理解するのにふさわしいふんい気づりのために寄贈された陶磁器や日本画、中国画などのコレクションの3つ

の柱となっている。そのほか年間数本の特別企画展として国の内外のすぐれた美術作品の展覧会を計画しており、より身近なところにて鑑賞を楽しんでもらうよう考えている。

開館を飾る特別展として「ルノワール」と印象派の巨匠たち展」を函館市や道新などと共催するが、ルノワールと同時代に活躍した、モネ、セザンヌ、ドガ、ピサロ、シスレー、ゴッコンなど印象派の巨匠たちの作品をスイスの個人コレクションと国内の作品で紹介し、19世紀後半のフランス絵画の流れを展望できる展覧会となることであろう。函館のあとは、福岡市立美術館で催されるだけであるから、まさに千載一遇のチャンスということで多数のご来館をお待ちしている。



ルノワール「勝利のヴィーナス」(一九一五〜一六)

北海道立近代美術館

「日本のガラス造形・昭和」

11月9日(日)～12月21日(日)

明治以後、産業中心の道歩んだ日本のガラスは、昭和に入りようやく新たな造形芸術を模索する動きが見え始めます。ガラスがまだ一般的に芸術として認められていなかった当時の状況の中で、西欧と日本、あるいは伝統と現代という大きな課題に直面しながら、試行錯誤がくり返され、ガラス造形の可能性が切り開かれてゆきます。

本展は、この昭和のガラス造形の流れを系統的に辿り、その特色や傾向をとらえ直すことによって、日本の現代ガラスの今後を展望するきっかけを提示しようとするものです。日本のガラス界をリードしてきた個性あふれる作家の中から、岩田藤七、各務鋤三をはじめ小柴外一、淡島雅吉、佐藤潤四郎、藤田喬平、岩田久利の7名をとりあげ、その170余点の代表的作品で構成します。



岩田藤七「水指・雲間」1975

北海道立旭川美術館

木の美伝統の日本

—— 現代に生きる木工芸の匠たち ——

わが国は世界でも豊富な樹種と、美しい材質の樹木に恵まれ、古来からすぐれた木工芸が発達してきました。明治時代になってその伝統が一時低迷するものの、現在再び復活し、古来から受け継がれた技術を基盤にして新たな伝統木工芸が開花しています。

とくに戦後になって、昭和25年に文化財保護法が新たに制定されてからは、伝統工芸の技術に対する保護と育成が行なわれ、それを受けて昭和29年には重要無形文化財の指定が行なわれるようになります。

また同年にはその技術と意匠を展覧する日本伝統工芸展が開催されるようになりました。こうしてすぐれた木工技術を身につけた現代の匠たちもあらわれ、工芸界を活気づけています。

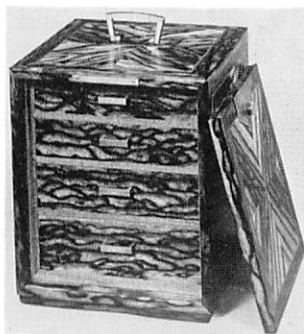
当館では豊富な森林資源に恵まれた道北地域とのかかわりから、木の造形を広く紹介する「木の美、シリーズ」を続けてきました。その第3回を迎える今回は、こうした現代の伝統木工芸に焦点をあて、それを一堂に展覧するものです。

出品作家は黒田辰秋(明治37～昭和57年)、氷見(ひみ)晃堂(明治39～昭和50年)、中臺瑞真(大正元年生)、

大野昭和斎(明治45年生)の重要無形文化財保持者(いわゆる人間国宝)4人を中心に、現在すぐれた作品を生んでいる12人の工芸家を加えた計16作家です。この匠たちの箱、棚、盆等のすぐれた木工芸を計87点によって紹介いたします。

指物(さしもの)、刳物(くりもの)、挽物(ひきもの)、木象嵌(もくぞうがん)などの多彩な木工技法に加えて、木肌や木目など素材の特性を生かしたすぐれた意匠を本展によって十分堪能いただけるでしょう。

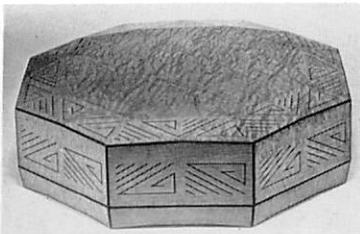
素材に対する日本人の鋭い感性と、高度な匠の技をぜひご鑑賞下さい。



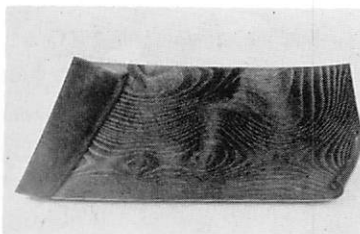
須田桑翠 黒柿小篋箱 昭和54年



黒田辰秋 拭漆彫花文長椅子 昭和24年頃



氷見晃堂 枳造木象嵌八積箱 昭和31年



大野昭和斎 玉椿杓目次金折紙香盆 昭和53年

北海道立三岸好太郎美術館

感動呼んだ「特別展示」

三岸美術館は、三岸好太郎作品の常設館であるため、大きな企画展を開催することはできません。しかし、三岸好太郎の芸術とその背景を深く知っていただくためには、当館以外に所蔵されている他の三岸作品や、かかわりの深い作家の作品の展示も必要となってきます。ちなみに1985年3月鎌倉の神奈川県立近代美術館で開かれた「歿後50周年記念・三岸好太郎展」では、出品された142点のうち81点（61%）が当館以外の所蔵になるものでした。

そこで、当館では今年度から館外に所蔵されているすぐれた三岸作品を「特別展示」として少しずつ紹介していくことになりました。第1回の特別展示には、三岸好太郎夫人の節子さん、長女の向坂陽子さんの特別のご厚意で、好太郎の絶筆「女の顔」（1934年）と「自画像」（1921年）を借用することができました。この2点に、



「特別展示」会場風景

修復後初公開となる「陽子像」（1927年頃）を加え、7月1日から3点を並べてご覧いただきました。

画家になる決意が表情ににじみ出た上京直前の好太郎の自画像、我が子への想いがほのぼのと感じられる愛くるしい長女の姿、「この次は線の太い、たくましい絵を描く」と節子夫人に言い遺して世を去った好太郎の言葉どおりに描かれた夫人の顔——それぞれに魅力をもつ3点の展示は、訪れた観覧者に新鮮な感動を呼びました。

財団法人 札幌彫刻美術館

入館者10万人を記録

昭和56年6月29日にオープンした当館も今年で5年目をむかえ、開館5周年記念として「一日本とドイツの作家たち—今日の金属造形展」の開催期間中6月11日、入館者10万人を記録しました。10万人目の佐々木啓子さんには、館長より記念の賞状と花束、記念品が手わたされました。

展示替

昭和61年度は、開館5周年記念「今日の金属造形展」、本郷新ゆかりの陶作家による「白石斎陶芸展—手と土への誘い—」、隔年開催の「第3回北の彫刻展」が開催され、9月9日以降は本郷新の常設展となります。本館には、裸婦像・頭像などブロンズ作品を中心に、記念館では、おなじみの石膏原型の他「無辜の民」シリーズ、「土と火の祭り」の他デッサン・油彩の絵画を展示してあります。特に、絶作として札幌市教育文化会館緞帳になった「白樺の詩」、あるいは初公開の裸婦デッサンも数点展示しています。モニュマンなどの作品制作のためには、このような多くのデッサンあるいは小品制作による研鑽

があつてこそといえるでしょう。本郷新の彫刻作品とデッサンを見くらべながらの鑑賞も、新たな発見がみいだされるかもしれません。

当館では、年数回の特別展のほか常設展も年2回ほど展示替を実施しています。

彫刻めぐり・美術館コンサート

当館の彫刻めぐりは、開館当初より友の会との共催で実施しています。札幌市内の彫刻めぐりのほか、今年は8月に奥尻島まで足をのばしました。今後、道内及び道外にも多数点在する彫刻作品の鑑賞、彫刻めぐりを実施していきたいと思っています。

美術館コンサートは、10月21日（火）「赤坂孝吉ギターの夕べ」を開催する予定です。



奥尻島 流政之制作「北追岬」にて

新入会員紹介 (61.9.12~61.10.31)

(61.9.11以前のnew入会員で会員名簿掲載者は省略)

◇個人会員 (25名)		加入年月	氏名	住所
加入年月	氏名			
61.9	佐藤 勝己	61.10	赤川 恭子	深川市太子町5-35
61.9	川畑 英子	61.10	赤川みちえ	札幌市白石区菊水7条4丁目
				片山サヨ方
61.9	幕内 明子	61.10	伊藤 春雄	神奈川県相模原市南台
				5-1-20-105
61.9	竹田 嘉子	61.10	名畑 八郎	札幌市南区真駒内柏ヶ丘9-3
		61.10	坂本 肇	西区発寒10条2丁目6-32
		61.10	後藤 吉子	中央区南3条西7丁目
				5-202
61.9	小林 ソト	61.10	益村 信子	西区24軒4条2丁目2-25
61.10	青山 文子	61.10	斉藤 武	中央区大通西26丁目183-80
61.10	対木 正文			円山公園パークマンション
				1-6
61.10	久松あけみ	61.10	上杉 恵子	東区北8条東5丁目12
		61.10	日暮 晶子	沼田町北1条5丁目1-76
61.10	名畑 節子			
61.10	小幡キクエ			
61.10	樟本須磨子			
				国立弟子屈病院官舎
61.10	小原 和子	61.9	和田 隆	北海道大学
61.10	丸山 佳子	61.9	籠尾 信子	北星学園女子短大
		61.9	小林 正枝	東日本学園大学
		61.10	瀬川 宗教	小樽商科大学
61.10	大野 紀子	61.10	吉川知火子	北海道教育大学
61.10	三宅忠四郎	61.10	佐賀 健一	北海道電子計算機専門学校
		61.10	三添 里香	北海道薬科大学
		61.10	鎌田 摩樹	北海道薬科大学
61.10	中 真彰			
				有功寮
				8-3

◇賛助会員 (8名)

加入年月	氏名	住所
61.9	和田 隆	北海道大学
61.9	籠尾 信子	北星学園女子短大
61.9	小林 正枝	東日本学園大学
61.10	瀬川 宗教	小樽商科大学
61.10	吉川知火子	北海道教育大学
61.10	佐賀 健一	北海道電子計算機専門学校
61.10	三添 里香	北海道薬科大学
61.10	鎌田 摩樹	北海道薬科大学

会員名簿の訂正

3年ぶりに会員名簿を作成しましたが、誤りがありました。おわびし、訂正します。

訂正箇所	正	誤
1頁 参 与	植村 敏 (北海道立近代美術館長)	
2頁 関 川 節 子	ボランティア部長	ボランティア
5頁 3 段 目	南香園	南光園
34頁	伏木 忠了	伏木 忠子

61年度事業の推進状況

○ 婦人美術講座を開講中です

今回で9回目になります。申込者が78名あり、抽選により50名の受講者となりました。6月18日の第1回に始まり12月3日の第20回で閉講となります。

受講者は資質に恵まれた方々ばかりで熱心に勉学に励んでおり、頼もしい限りです。

○ ボランティア部員が街頭で広報活動をしました

ボテロ展の開館に合わせ、9月上旬から札幌市内3カ所（五番館前、三越前、4丁目プラザ前）で延33人が出動してチラシ5千枚を配布しました。この結果入観者数が予想を上廻り、近代美術館およびSTVから感謝のことがありました。

○ 道立近代美術館の移動展に売店を出し感謝されました

1. 開催期日・場所

9月4日～9月9日 蘭越町
9月12日～9月17日 三笠市
9月20日～9月25日 砂川市

2. 頒布商品

絵はがき	収蔵作品の主なもの	20種
額 絵	同上	4種
図 録	ミュージアム新書他	9種
ガラス製品	ペーパーウエイト他	3種
額 縁	桜三角他	2種

3. その他

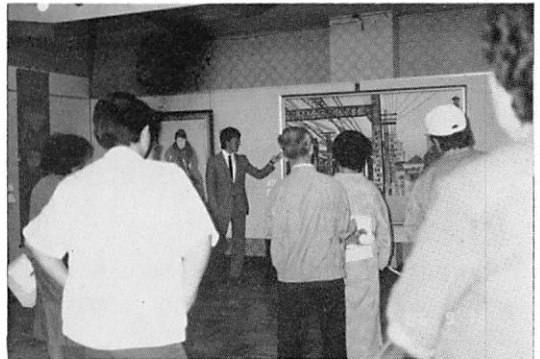
商品の輸送は、展示作品と同じに、また販売は地元市町村に委託しました。



講義（武田学芸部長）



街頭風景（4丁目プラザ前）



観覧風景（三笠市民会館）



売店風景（蘭越町公民館）

.....事務局だより

○ 身体の不自由な方々を美術館に招待しました

10月16日真駒内養護学校中学部生徒62名（他に引卒者35名）を道立近代美術館にお招きし、常設展及び特別展（黄河文明展）を鑑賞していただきました。

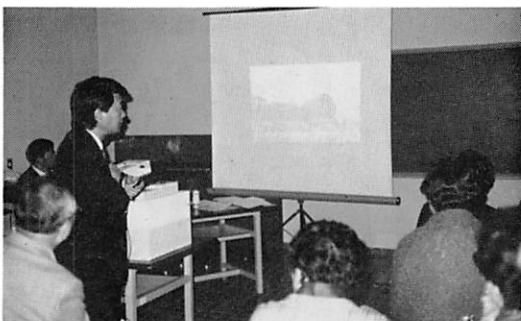
サービスの内容は、ボランティア部員の作品解説、交通費の全額負担、学校用図録の贈呈、飲物の提供です。なお、入館料は北海道新聞社および近代美術館のご配慮により無料とされました。



黄河展観覧風景

○ 第2回国内美術研修旅行は予定どおり実施されます

10月29日から11月1日まで3泊4日の小旅行として晩秋の奈良を中心に「飛鳥・斑鳩の里」の探訪を企画



参加者研修会（10/25）

のところ、申込者が46名に達し出発前の準備をしています。コーディネーターには近代美術館の奥岡学芸第一課長の派遣が予定されており、良い天気にも恵まれて快適な旅となるよう祈っています。

○ 第7回海外美術研修旅行は好評です

11月18日から29日まで12日間フランス（ニース、マルセイユ、アビニオン、パリ）への美術ツアーを募集のところ、申込者が60数名と定員を上廻ったので2班編成に計画変更しました。コーディネーターとして近代美術館の天野学芸員および旭川美術館の新名学芸員の派遣が予定されているほか日本交通公社から添乗員2名が同行しお世話することになっています。

お知らせ

○ 会員証の利用範囲を広げました

1. 9月23日オープンの道立函館美術館について、他の美術館の扱いと同じように会員証の利用を認めることにしました。
2. 道立近代美術館内食堂（ボザール）の飲物について、札幌グランドホテルのご厚意により一率に50円割引きされることになりました。ご利用の際は会員証をご提示下さい。

○ 会費の納入は早めをお願いします

本年1月から6月までの会費納入率は、約75%と高く皆様のご協力に感謝しています。しかし、事業活動の円滑化のため財源の確保が必要です。一層のご理解をお願いします。

○ 10周年事務局が発足しました

「北海道に名画を贈る道民の会」の発足準備のため10月1日から事務局長に大菅生明氏（元道立美術館長、元道立図書館副館長）を選任しました。事務局は、協会会事務局の隣りで、電話（011-641-5688）も増設しました。